

思ひ草

第3号

平成22(2010)年12月22日 発行

サンタとお地蔵様 ～「見つめ、見守る」教師に～

人間開発学部長 新富 康央



学生たちは、「その子なりに」育ってくれているようです。11月は本学部学生たちの有志で、キャンパス周辺のゴミ掃除をはじめてくれました。また、「学生部長杯」というたまブラーザキャンパスにおける体育祭も、彼ら自身が企画し、運営してくれました。

そうした彼らの成長を喜んでいるうちに、今年も「師走」に入りました。街は、クリスマスフェスタで賑わっています。しかし、時に殺風景な光景に見えることもあります。子どもたちが真に求めているプレゼントは、果たして何であろうか、と。「心の手当て(本学部の教育理念の一つ)」、つまり心に手を当てるスキンシップを待っている子どもは、全国にたくさんいるはずです。

しかし、先日も、ある先生から辛くなるような話を聞かされました。子どもを褒めた担任教師が、その親に叱られたというのです。学習塾全国模試で上位になり、嬉しそうに報告に来た子どもを、先生はそれなりに元気付けてやろうと声をかけまし

た。「よくがんばったな」。それに対して早速、親からの抗議の電話です。「1位にならないといけない、と言うべきだった」と。

この子が望んでいるクリスマスプレゼントは、ただ一つ。ホッと一息つける安らぎの時間と空間ではないでしょうか。おもちゃでも、かわいいぬいぐるみでも、立派な子ども服でもないはずです。

そっと窓の外を眺めると、お地蔵様が鎮座されていました。お地蔵様は、子どもたちの守り神です。ふと懐かしい風景を思い出しました。お地蔵様に見守られ、安心して遊ぶ子どもたちです。その原風景は、TVアニメ「日本昔話」の世界であり、映画「ALWAYS～三丁目の夕日」の世界です。そこには、子どもの成長を「見つめ、見守る」地域の大人たちがいました。本学部の学生達も、教育ボランティアや教育インターンシップを通して、子どもたちと心のスキンシップのできる指導者になる資質を磨いて欲しいと願っています。

子どもが今を生きられるように

教育実践総合センター 副センター長 夏秋 英房



「今日はこんなことがあって楽しかったんだよ!」、「これからこんなことができるようになりたいな」、子どもと話をしているよく聞かれる言葉です。子どもは今を生きる存在であり、また将来へ向けて生きる存在です。子ども自身の思いと願いもここにあります。

そこで気になるのが、現代の子どもは今を十分に生きさせているのだろうか、ということです。とくに遊び不全感が子どもの生活に通奏低音のように潜在しているように思えます。近年取りざたされる「小1プロブレム」にしても、校内・校外における子どもの暴力行為の増加にしても、子ども期を十分に生きさせていない不全感が子どもの荒れやすさにつながっているのではないのでしょうか。

国立青少年教育振興機構が「子どものころの体験は、その後の人生にどんな影響を与えるか」という問題設定の調査結果を先ごろ発表しました。その結果の1つが、子どものころの体験量の差が、大人になってからの活力(やる気や学習意欲)に結びついているというものでした。子どもの生活体験の基盤にある

ものはやはり遊びでしょう。

先日、青葉区内の保育所と幼稚園、小学校の連携のための会議に当センターの全員が参加しました。子どもがどのような特色をもった園で育ってきたのか、子どもの発達環境はどのようなものであり、今直面している発達課題はどのようなものであるのか。また、児童となってからどのような生活とカリキュラムが用意されているのか、卒園した子どもたちがどのような学校生活と発達の過程をたどっているのか。乳幼児期から児童期にかけての子どもの育ちについて保育と教育の関係者が相互に理解し合い情報を共有していくことは、双方にとって大切な手がかりとなることでしょう。

そのときに、この子どもはどれほど遊びきれてきたのか、子どもとして充実した生活を送ってきたのか、という視点は重要だと思います。何もかもが目的合理的にPDCAサイクルで図られる時代ですが、大人が図りきれない子どもの「今」の自由な遊びこそ尊重され保障されるべきものだと思います。